書斎の荒野

清水昶

白地社

親，斎の荒野

白地社

書斎の荒野

一九八四年二月十日発行

定価——一八〇〇円

著者——清水 昶

©Akira Shimizu 1984

発行者——土岡 忍　発行所——白地社

〒六〇〇　京都市下京区綾小路通岩上角　飯田ビル2F　電話(075)八二一三三八七

印刷所——正美社印刷㈱　製本所——清水製本所

書斎の荒野 ＝ 目次

I

10 桜桃忌
13 泥棒
17 椋鳥の夢
21 それは美学の問題である
26 寄贈本
29 笑殺の現場
32 詩生活
37 書店をうろつく神様
40 ある出来事
43 詩は衰弱しているのか
48 恐怖のゲーム　ある日の講演から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

53 忘れえぬ名画　香月泰男『運ぶ人』
58 哺乳壜とウイスキー
61 異説・オツベルと象
66 遠い歌が聞こえる

II

78 なお深いニヒリズム　三島由紀夫
83 黒田三郎氏のジャワ
88 魂の伝言　メルヴィル『白鯨』について
93 イメージで旅する　福永武彦
98 廃市柳河　北原白秋
103 老婦人の唄
111 ある少女

114 青空と荒野を愛し
117 理想と事実 石川啄木
121 失われた詩 中原中也
126 酒と希望が残りをやっつける 石原吉郎
131 山頭火と酒
136 埴谷雄高
140 暗鬱さの中で 高橋和巳
144 ドストエフスキーと太宰治
148 若い詩人の肖像 伊藤整
153 牧水の恋と酒1・2
162 緑が雲を思う 藤田晴央
166 ひそかに時代は動揺している
169 感情の線

172 淋しさについて　福島泰樹

Ⅲ

178 青春
182 わが町・新宿
187 暗緑の森の中には
197 ヒトケタの希望
200 哀愁のビリー・ホリディ
203 男おいどん　松本零士の世界
210 難解の未知
214 望郷
219 長靴
222 夢のお菓子

225 青春の明暗
龍馬について
239 過ぎ去りゆく日々
249 清水昶氏への質問
あとがき
初出誌紙一覧

装丁 倉本 修

書斎の荒野

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

I

桜桃忌

今年、桜桃忌に行ってきた。太宰治の墓のある三鷹の禅林寺は、わが家から歩いて三十分ぐらいの距離である。一度、行ってみたいと思っていたが、いつでも気軽に行けると思うと、つい足が遠のいてしまっていたのである。それにわたしは桜桃忌などというあつまりに行く趣味を持ちあわせてはいない。ただしなんとなく気になってはいた。一昨年、太宰治論を一冊にまとめたせいもある。その日は要するに暇だったこともあって半ば気恥かしい思いを抱いて行ったのである。どうもひとりで行くのはてれくさい。朝、太宰ファンでフリーのライターの友人F君を電話で叩き起こして同行を願った。

梅雨でぐずついていた日がつづいていたが、その日はひさしぶりに晴れていた。禅林寺につくと、すでに若い男女が寺の境内に三三五五たむろしている。八十パーセントぐらいは若い女性だ。寺の裏手の太宰の墓に行ってみると、行列ができていた。みんな放心したような

表情で墓の前につっ立っている。いまだに根強い人気を持つ太宰に少しばかり嫉妬を感じた。太宰の墓の向いがわは森鷗外の墓である。そちらのほうには、ひとびとは一顧だにしない。わたしはなんだか鷗外が可愛想になってきて、持っていった線香をひとにぎりにまとめて火を点け、鷗外の墓前にそなえた。まるで焚き火である。もうもうと煙がでた。太宰の墓に注目していた女性たちが驚いたようにふりかえった。

わたしはポケット壜のウイスキーを舐めながらF君と一緒に鷗外の墓石をかこむ石の柵に一時間あまりぼんやりと腰掛けていた。太宰の墓前で合掌するひとはひっきりなしにつづいた。墓石には酒がかけられ、きらりと涙ぐむ女性もいる。そんな光景を見ていて奇妙な気持になった。本来、太宰は女性の敵なのだ。先妻小山初代を見放し山崎富栄を心中に巻き込み、その他云々……。ああそんな男が死後も女性たちに慕われるとは。それに太宰の墓も立派すぎる。でんと胸をはるようにして建っていて、ブンガクの権威そのもののようだ。太宰のブンガクは、もっと弱く繊細で人目から隠れるようにしてひっそりと存在している。わたしは太宰の墓を見て失望した。

しかしそんなことは、ゆえのない太宰への嫉妬である。わたしも、あと二、三年すれば太宰が死んだ年齢になる。彼の仕事の質に較べれば、自虐的にならずとも、わたしのそれは虫の糞のようなものである。畜生、太宰め！　とばかり残りの線香を束にして墓前でもうもうと火を放った。残っていたウイスキーもごくりと飲み干した。

寺の近くでとんかつライスを食べ、金三千五百円で買ったというF君の中古の自転車に相乗りして帰る途中、自転車がまっぷたつに折れた。ちかごろ、わたしの心も傷つき壊れやすくなっている。F君は折れた自転車を玉川上水の薮の中に棄て二、三度いまいましそうに蹴った。

泥棒

新婚ほやほやのとき、東京は西荻の六畳と四畳半のアパートに住んでいた。二階建てのそのアパートには、十世帯ぐらいの家族が住んでいた。ほとんどが若い共稼ぎの夫婦だったので昼間になるとアパート全体ががらんとする。わたしたちも共稼ぎだった。

いまと違って当時のわたしは途中、飲み屋さんにひっかかることもなく仕事が終ったら、まっしぐらにニイヅマの待つ部屋に帰った。いつものようにいそいそと帰宅したある日、一足先きに仕事を終えて帰っていたニイヅマがニコニコ笑って待っていた。朝、会社に行く前に来ていた現金書留の中味をあなたは無断で持っていったでしょうと彼女はいった。その頃わたしは会社に勤めるかたわら原稿を少しばかり書いていたので思いだしたように現金書留なるものが来た。みると書留の封は破られていて、なるほど中味がない。しかし、わたしは金を持ちだした覚えがない。よくその封筒をみてみると封の破き方が少しばかり異常にビリ

ッと裂けている。

そのとき一瞬ふたりで顔を見合わせた。隣りの六畳の部屋の電気をつけてみると土足の足跡が点々としている。泥棒さんにヤラレたのだ。あわてて引出しの貯金通帳を探してみたら無事あった。でもタンスの中はひっかきまわされている。泥棒さんは現金のみを狙い、足のつく貯金通帳には手を触れなかったのだ。

あわてて大家さんに電話したら、あなたのところもそうでしたかというのんびりした返事が返ってきた。アパート全体が軒並、泥棒さんにヤラレたらしく、夕方警察の人が事情聴取に来ていたという。それからが大変だった。大家さんがまた派出所に連絡し、まず若いポリさんが来て、根ほり葉ほりおなじことを繰り返し聞く。たとえば、わたしたちが朝出掛けた時刻、帰ってきた時刻、書留の中味の金額、そんな単純なことを十数回も聞いたと思う。あちらも仕事なのだろうが、こちらも仕事が終ってぐったりしているときに、そんな単純な質問を繰り返えされたらたまったものではない。後に聞いたところによると調書をとるために警察官は確実を期すためにおなじ質問を何度もするらしいのである。

その若いポリさんが去ってホッとしていると今度は刑事がペアで来た。ひとりはジャンパー姿のうらぶれた老刑事で、泥棒さながらの格好をしていた。もうひとりは若いパリッとした背広姿で、そのままテレビの刑事物に出てきそうな青年だった。それからがまた大変だった。一難去ってまた一難である。前の若いポリさんとおなじにおなじことを根ほり葉ほり聞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co